

WSF Japan について

“わたしはこう考
えます!”

◎日本初の女性スポーツ組織として期待

文芸春秋「ナンバー」編集長・岡崎満彦さん



先日、ある話の中で女性のスポーツの話題がでました。それは、日本体育大学の山川純教授の研究についてだったのですが、たしか、テーマは「女子選手の社会的、心理的特性について」だったと思います。女性は男性にくらべ自己コントロール能力が低いとか、コーチに対する依存心が強いといった内容でした。私はこれ聞いて、女性と男性はすべてが共通ではあり得ないと思いましたね。ウチの雑誌でも取り上げますが、この事はつまり片方だけに該当する問題解決をしてもそれでは完全とはいえないわけです。現在、男性にとっても大した問題でないにしても、女性の問題として浮かび上がったことが将来、男性にとっても必要になってくる場合がでてくるかもしれません。

そういう意味で、WSF Japan という日本で初めての「女性スポーツに取り組む団体」ができたというのは大変すばらしいことだと思いますね。

◎スポーツウーマンが力を発揮すべき時代

日本航空健康管理室調査役・山本真知子さん



今までスポーツに限っていても男性は良かったのです。就職に有利だったりして…。でも、これからは、女性も社会で活躍する人が、いま以上にふえてきます。そんな時に、女性に要求されるであろう、精神力、健康、思いやりを育てるにはスポーツが一番です。

私も、若い人たちに負けないよう、精神的にも肉体的にも社会に適応していくために必要なノウハウを、このWSF Japanで身につけられたらと思っています。どうぞよろしく。

◎何も女、女といわなくても……

猪谷渡辺スキースクール副校長・渡辺政子さん

発足記念のパーティーに出席した印象では、何ヶさんが「女性が、女性が…」と片肘張ったような団体のような気がして、ちょっと場違いな所

に来てしまったと感じました。

組織作りにしても、女子スポーツの指導、研究にしても別にどちらがやってもいいんじゃないかと思うんですよ。

あくまで、指導にしても研究にしても、スポーツということが出発点ですから、その上でいろいろな問題をみんなで考えていけばいいのではないのでしょうか。

◎一日も早く解散することを祈ります??

日本バレーボール協会専務理事・松平康隆さん



一日も早く解散することを祈ります。

女性が女性だからという理由のハンディキャップを負わずに、伸び伸びとスポーツができ、またそこから、他から得られないすばらしいものを勝ちとることができるいい世の中になってほしいですね、一日も早く。

“女性スポーツブーム”とマスコミは、はやしたてますが、現実には厳しいのが実情ではないでしょうか。私は、スポーツ21が主催した第1回女性スポーツセミナー、一昨年の国際女性スポーツ会議にも出席させていただきました。その時にも感じましたが、男性にはない問題がまだまだ多くあるようです。早くいい世の中になってほしいですね。

◎焦らず、ゆっくりとやりましょう

日本クレー射撃クラブ会長・中島真佐子さん

私たちのクラブも、発足してから4~5年目にして、やっと形ができてきたようなものです。女性は、主婦であったり、会社員であったりして、男性のように、おいそれとはまともでないのが常です。ですから、焦って失敗するより、ゆっくり着実にやっていきたいと思っています。

あと、女子を指導する立場、あるいは女性の指導者の人たちとの横のつながりがほしいですね。

◎ママの健康は明るい家庭の第一歩

日本家庭婦人卓球連盟会長・加藤紀生子さん

現在、プロの選手、現役の選手、家庭婦人の選手といろいろな人がいるけれど、私は、主婦という立場で、家庭生活の中におけるスポーツの価値を大切にしたい。

“えまます!”

WSF Japanでは、家庭婦人であり、かつスポーツにたずさわっている人たちとの輪を広げて行けたらと思っています。

◎差別解消、問題解決の場として活動を

池袋西武スポーツ館長・目黒伸佳さん



日本というタテ社会で成り立っている国では、横のつながりを持つことがとても難しいのが現状です。

しかし、このWSF Japanは女性スポーツに携わる人たちが本気で、かつ前向きに築いた団体です。会をより発展させていくには時間を要するかもしれませんが、基礎がしっかりしたものだけに、私たちの期待も大きいですね。

スポーツをやる上で、ひとりでは解決できない問題、ひとりではやり遂げられない研究などを、みんなでやっという場ができたことは、本当にうれしいことです。

生活の中のひとつの喜びとして、スポーツする場を提供するのが私たちの役目であり、そこから生まれる差別や問題を解決していってくれるのがWSF Japanだと思います。

お互いにスポーツの発展につながるよう、今後の成果を期待していますし、私たちが頑張りたいと思います。

◎共通な問題こそみんなで協力して解決を

女子プロテニスプレーヤー・佐藤直子さん



以前から、女性スポーツ界は男性に比べ横のつながりが弱いなあ、と感じていました。

男性スポーツ界では何かと機会をもって、プロ選手同志の交流をはかっているようです。

しかし、交流を持たなくてはいけないのはむしろ女性の方なんです。たとえばテニスの場合、女子の賞金は男子の6分の1程度といった格差があります。他のプロスポーツにもあると思いますが、女性のプロ選手は一戦技の中ではごく少数で、改善を訴えても力が弱い。共通な問題こそ、みんなで協力していかないと解決できないと思います。とにかくスポーツ好きな女性なら誰とでも気軽に集い、励まし合い、勉強し合って行きたいですね。

◆第1回勉強会のお知らせ◆

WSF Japanでは、3か月に一度、「勉強会」を開催いたします。今回は、1回目ですので、まずは、講師の方をまじえて、誰もが何でも話し合える茶話会的なものからスタートしたいと思います。

今回のテーマは「女性とスポーツについて」です。なお講師および進行役には次の4人の方をお願いしました。日程等については8ページをご覧ください。

<講師>

★清和 洋子

1930年東京都生まれ。東京女子体育専門学校卒業。横浜市立西中学校、横浜市翠嵐高校で教鞭を執った後、1965年ワシントン州立大学に留学。*日本とポランドの青少年体育とスポーツ*というテーマで比較学を専攻。1972年帰国。日本女子大、立教大の講師を経て、現在、中央大、東海大講師。

女性史および女子体育史を研究中。72年、ワシントンからマイカーのワーゲンでシルクロードを通過し単身帰国したというスーパーレディ。

★小田 多江子

1937年東京都生まれ。慶応大学英文学専攻卒業。1961年米フロリダ州立大学に留学。*スポーツ・体育教授法*を幅広く専攻し、米国で教師、コーチの実地訓練を受けたという日本では珍しい女性である。また、1970~76年ご主人(国連勤務)の仕事の関係でバプアニューギニアに在住。

現在、8歳と10歳の娘さん二人を持つ主婦。しかし、この4月に日本体育大学に入学。その合間にテニスのコーチも。

1960~70年代はほとんど海外に在住。その間、オーストラリア、タイでは日本語を、日本では日体大女子短大、慶応外語で英語を教えた。今でも、スポーツ、体育、語学、そして主婦業と幅広い勉強を重ねている。

★萩原 美代子

1946年東京都生まれ。東京教育大学(現筑波大)卒業。現在は文化女子大学講師。

1980~81年の7月まで、イギリスで*マダム・バーグマンとその学校*というテーマでバーミンガム大学へ研究のため渡英。(マダム・バーグマンとはイギリスで初めて女子の体育指導者養成学校を創った女性)また、「近代女性体育史(日本体育社より刊行)の中では、女性スポーツのバイオニアというべき人見絹枝について研究、執筆。他に、女子の運動服の歴史の専門家でもある。今後は、米の女性スポーツ史にも取り組んでみたいとのこと。

<進行役>

★三ツ谷 洋子

1947年東京都生まれ。慶応大学法学部政治学科卒業。サンケイ新聞社会部、サンケイスポーツ運動部を経てフリーのスポーツ・ジャーナリストに。また80年3月には有限会社スポーツ21を設立。その秋に第一回国際女性スポーツ会議を企画、実施。

現在、会社としてはスポーツ全般にわたる企画、調査などを中心に仕事をやるから、スポーツ・ジャーナリストとして、新聞、雑誌に執筆、セミナー、講演会、シンポジウムにおいて活躍中。いままでもなく、WSF Japanの発起人、また代表。